

源氏物語の研究支援体制の組織化と  
本文関係資料の再検討及び新提言のための共同研究

課題番号 19202009

# 源氏物語本文の再検討と新提言

The Reexaminations and the New Proposals of the Texts of *The Tale of Genji*

2

平成19年度科学研究費補助金

基盤研究(A)研究成果報告書

平成 21(2009)年 3 月  
研究代表者 豊島秀範(國學院大學)

カロリーナ・ネグリ

若紫の巻 一恋の物語の始まり一

これまで多くの論文に指摘されているように、「若紫」という巻の造形は昔物語の要素を多く継承しています。まず巻の名前は『伊勢物語』の初段にある次の歌の言葉から取ったものだと考えられています。

むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いと  
なまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとほしたな  
くてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。  
その男、信夫掬の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず。

これは奈良の春日の里に、若くて魅力的な姉妹を発見した貴公子の歌です。『伊勢物語』の主人公と同じように、源氏も思いがけず田舎でかわいい少女を初めて見た時、紫のイメージをあらわす歌を詠みます。

手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草<sup>2</sup>

作者は、『伊勢物語』の有名な初段を引用しつつ、これから恋の物語が始まるということを読者に知らせますが、同時に、貴族社会の婚姻慣習に従わない変則的な男女の関係であることも匂わせます。しかし、『伊勢物語』の姉妹と違って『源氏物語』の若紫はまだ男女の歌の贈答ができない童女として描かれています。物事の分からない幼い女の子と言えば、「物語の出で来はじめの親」である『竹取物語』のかぐや姫が思い起こされるのではないのでしょうか。竹取の翁がある日竹の中に輝く三寸ばかりの女の子を発見して、それを家に持って帰って、養育してその子が美しい女性になる話です。幼い女の子というのはまだ大人になっていない女性で、清純無垢な存在として現れてきます。それは北山で登場する若紫に通じるイメージをもつ童女だと思われています。

『源氏物語』における若紫の登場は、『伊勢物語』の初段の浪漫性を継承していると思われませんが、まだ男女関係に通じない童女の形象としては、あきらかに『竹取物語』を継承しています。つまり、彼女はのちに、愛の物語の主人公となりますが、当初は、かぐや姫と同じように養育される必要のある童女なのです。若紫がこの両方の要素を持って登場してきたことは大変重要なことと言えます。

若紫は、藤壺の姪として、つまり藤壺「ゆかり」の女性として登場してきます。亡くなった源氏の母親によく似ている藤壺は、源氏にとって理想の女性であるとはいえ、藤壺は父帝の妃であり、自分の継母であります。このような恋が許されるはずはありませんから、源氏は藤壺に似た女性を希求することとなります。そして、北山で藤壺に似た若紫を見て感激し、自分の思うままに教養育てられる妻にしたいと思ったのです。

若紫は「若紫」の巻に、次のような一節があります。

十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの妻えたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容顔なり。髪は扇をひるげたるやうにゆるゆらとして、顔はいとあかくすりなして立てり。

ここでは、若紫は特に幼く設定されています。それに、たいへん心細い境遇にいる童女として描写されています。若紫は藤壺の兄、兵部卿官の娘ですが、その生母は世間に認められた妻ではありませんでした。兵部卿官には何人かの子を生んだ身分の高い北の方がいたので、若紫の母は日陰者として物思い重ねたあげく、若くして死んでしまいました。そこで、若紫は祖母のもとで育てられました。その祖母といっしょに祖母の兄にあたる北山の僧都の庵に住んでいたのですが、その時たまたま、わらわやみに悩んで北山の聖のもとに加持を受けに訪れた十八歳の源氏が、初めて若紫を垣間見したわけです。若紫の母親は、源氏の母親である桐壺に似たような悲しい人生を送った女性です。そして若紫自身もまた、源氏と同様に、年老いた病気の祖母といっしょに住んでいます。この少女を後見したいと思った源氏は、僧都に対し、そして尼君にも、その意向を申し入れますが、年齢と境遇が釣り合わないため断られます。備京したのちも、源氏は何度か自分の希望を僧都と祖母に伝えますが、若紫の祖母は、将来の結婚の約束はできても、現時点では若紫を源氏に預けることはできません。つまり祖母が生きている限り、源氏の教育計画は実現不可能ということになります。やがて、祖母が亡くなり、寂しい日々を過ごしている若紫がまもなく父宮の邸に引き取られることになっていると聞き、源氏はそこで

ようやく、父宮が若紫を迎えに来る前に、自分の邸である二条院の西の対に若紫を住まわせることにする、ということになります。

## 源氏と若紫の結婚

ところで、源氏と若紫の関係は平安貴族の婚姻慣習を鑑みると、特殊な面があります。つまり、家と家、親と親との間の合意に従って、一定の儀式にもとづいて結ばれた仲ではないため、正式な結婚ではないとの見方が強いわけです。これを根拠に、彼女はしばしば、「妾」、あるいは「情婦」といったとらえられ方をします。

平安時代には、一夫多妻という制度があって、結婚は貴族の力関係や人間関係によって調整されていて、高群逸枝氏が指摘しているように、「婿取婚」は普通の婚姻形態だったのです。「婿取婚」における婿は確かに結婚開始時から妻の家へ通ってその家に住みつき、生活面でも舅から後見を受けますが、実力がついたら、独立居住に入るのが普通でありました。「婿取婚」の婚儀の本質は、妻の家が「外来者」の男性を日常生活において家族の一員として承認するところにあります。その承認によって、妻の家に住むことはできても、それは正妻の座を保障するわけではありません。逆に言えば、父親による「婿取婚」の婚儀を通過していないからといって、妾であるとも言えません。従って、父親による「婿取婚」を通過したかどうかで紫の上の妻の座を決めることはできないと考えられています。また、当時の「婿取」は必ずしも父親によって行われたものとは限らないようです。平安貴族の居住形態から考えても、夫婦同居と夫婦別居が並存する社会においては、当然、父親と母親のもとで成長する子供もいれば、母親、或は母方の親族のもとで成長する子供もいました。女性が結婚する場合、父の後見が望まれますが、多くの場合は、一緒に生活している母親や、母方の親族が後見者として婿を取る場合もあります。このような慣わしの中で、一組の男女が、どのようにすれば「結婚した」と認識されるかという点、男性が女性の家へ行って逢った翌朝、後朝文を送る、ということも三日続けて行う必要があります。つまり、三日続けて女性の家へ通い続けるわけです。その三日目の夜に「三日夜の餅」を食べる儀式があります。この儀式は、父親による婿取の場合も、本人同士の合意で結婚した場合も、同様に見られます。後見を重視する当時の社会においては、親の承認は重要なものとされていました<sup>3</sup>。

源氏と紫の上の結婚に話を戻しますと、源氏が十二歳の時、左大臣の娘が物怪によって殺されます。法事が終わってからも、源氏はなお左大臣の家に籠ります。その期間が終わって、源氏が二条院に帰ってみると、しばらく逢っていない間に、若紫がずいぶん成長して、藤壺と

うりふたつの女性になっていました。そこで源氏は、若紫を自分の妻にしたいと思いますが、若紫は応じません。しかし、ある朝、次のようなくだりがあります。

男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬあしたあり<sup>4</sup>。

つまり、二人の新枕はこのようにこっそりと、だれにも知られず実現されるわけです。先ほど申し上げましたように、当時の婚姻の慣習として新婚三日目の夜には「三日夜の餅」を食べる慣習がありました。その餅は常に女性の側から用意し、男性に食べさせるものです。そこで源氏は、これみつに用意させた餅を若紫の女房に持たせませう。そして儀式が内々に行われることとなります。

人はえ知らぬに、つとめて、この箱をまかでさせたまへるにぞ、親しきかざりの人々思ひあはすることどもありける。御皿どもなど、何時の間にかし出でけむ、華足いときよらにして、餅のさまもことさらび、いとをかしうととのへたり。少納言は、いとかうしもや、とこそ思ひきこえさせつれ、あはれにかたじけなく、思いたらぬことなき御心ばへを、まづうち泣かれぬ。「さて、内々にのたまはせよな、かの人もいかに思ひつらむ」とささめきあへり<sup>5</sup>。

これは若紫側の女房の反応です。女房たちは、源氏と若紫との関係の変化をこの「三日夜の餅」で悟ったわけです。

これにひきかえ、桐壺の巻に描かれている源氏と紫の上の結婚は、次のように描かれています。

その夜、大臣の御里に、源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづききこえたまへり。いとさびはにておはしたるを、ゆゆしうつくしと思ひきこえたまへり<sup>6</sup>。

これをふまえますと、源氏と若紫の結婚は、婿として源氏を迎える立派な儀式とは違って、内々に行われる非常に単純な婚儀です。しかし、内々ながらも「三日夜の餅」の儀をとりおこなったわけで、当時の婚姻慣習から見れば、正式な結婚だと言えるかもしれません。実は、この結婚は後に若紫の喪着によって社会に公認されることとなります。しかし、当時の社会においては、男女関係が先に成立し、事後的に社会に公認されることも決してめづらしくなかったもので、婚儀の立場から考えれば、源氏と若紫の結婚は、一概に、変則的な結婚であるとは言えない、と思われまふ。

## 紫の上が源氏の北の方になれる可能性

既に木村佳織氏が指摘されたように、『源氏物語』の中で紫は殆ど「上」と呼ばれており、「北の方」とはあまり呼ばれていません。『源氏物語』の「上」の用例を見ると、「上」と呼ばれた女性は必ずしも貴人の正妻とは限りませんし、「上」と呼ばれていない女性も貴人の正妻ではないと言えません。他の平安時代の文学の作品の用例を調べていくと、確かに、「上」という呼称は、ある女性が正妻であるかどうかを表す言葉ではなくて、たんに、一家の女あるじとして絶対優位な立場にある人を、目下の者が敬意をこめて呼ぶ敬称です。つまり、母親であれば子供に、女あるじであれば、侍女達に呼ばれる言葉です。「上」に対して、「北の方」は、呼ぶ者と呼ばれる者とは上下関係にあるという意味を持たず、あくまでも客観的な呼称です。『源氏物語』においては紫の上を使う「北の方」の用例が少ないのですが、その原因は、彼女の妻の位置によるものではなくて、語り手の視点の問題として考察されています。「北の方」が、呼ぶ人物に距離をおいて、相手を客観的に敬意をもって呼ぶ時の呼称として使われるのに対して、「上」は、主観の強い呼称で、親近感のある女房たちは、話の中心になる貴人の妻を、「北の方」よりも「上」と呼ぶことのほうが多いようです。『源氏物語』の場合には、語り手が常に源氏の家庭園内の話を中心に語るという形をとっているため、源氏の妻である紫の上は、当然「上」と呼ばれているという結論になります<sup>9</sup>。

これまでの考察をいったんまとめますと、源氏と紫の上の結婚は、変則的というよりは形式にのっとった結婚であり、また、『源氏物語』の中で、紫の上に対して使われている「上」という呼び方は、紫の上が源氏の北の方ではないという保証にはならない、ということです。それをふまえた上で、はたして、紫の上のような女性、つまり家族の後見がない女性や、子どもに恵まれない女性は、平安時代には、貴族の男性の北の方になれたのでしょうか。

『蜻蛉日記』などの文学作品を読んでも、平安貴族の正妻は、事前に、あるいは、正式な婚儀や最初の結婚かどうか、などによって決まるのではなくて、事後的に選定されることが明らかになっています。初妻であることや、正式な婚儀は、慣習の上で、或は権勢の上で有力な要素であっても、それで正妻になるわけではありませんでした。当時の男性が複数の交渉の中で、妻の家の権勢、妻の所に子どもがいるかどうか、そして夫の妻に対する愛情などによって、最終的に男性本人の意志で決まるものだったと考えられます。男性には、結婚のあと、理想的な妻を選択するための時期が与えられていました。通い婚を経て、複数の女性の中から、そのうちの一人と同居に至るのが当時の貴族の結婚の実態でした。通い婚の時期は選択の期間でもあれば、男性がある程度の社会的地位に至るまでの準備の期間でもありました<sup>10</sup>。

貴族の男性は、まず女の子の出産を期待していました。それは天皇に入内させるためです。貴族の女の子の将来の幸福は、后になるか、幸福な受領の妻になるかであると認識されていました。また、父親たちにとっては、娘を入内させ、道長のように権力を手中に収めることが期待されました。しかし、女の子が生まれると、その次には男の子を望みました。政治的地位を継承させ、家筋のラインを太くするためには、男の子が必要とされていたからです。それから、貴族の男性は、できれば、男女ともに、多くの子供を持つことを望んでいました。医学の未発達な平安時代には、幼い時に亡くなる子どもや、出産で亡くなる女性が多かったからです。女性の産死は、若年結婚や、立て続けの出産による、女性自身の体力にもよったのではないかと考えられます。産死の危険を承知しながらも、入内する女性は、当然ながら出産を望み、また周囲からも期待されました。ところが、子どもを産めない女性もいました。その女性たちは、たいへんな精神的な負担を強いられることとなったはず<sup>11</sup>。

『枕草子』百三段では次のように書かれています。

くちをしきもの。(中略)いみじうほしうする人の、子産まで年頃具んしたる<sup>12</sup>。

残念でがっかりするもの。非常に子どもを欲しがっている人が、子どもを生まないで、長年妻と連れ添っているものだと言っています。やはり子どもが生まれないと、或は少ないと、他の妻を作る口実にもなっていました。平安時代の一夫多妻制度は、このような事情から生まれてきたのではないかと考えられています。貴族の男性はただの遊びで複数の女性のところに通っていたわけではなく、社会的地位を得るために、妻の家族の援助と元気な子どもを求めていたからこそ、同時に複数の女性のところに通う必要があったというわけです。従って、同じ社会制度を反映している『源氏物語』においても、栄達していく源氏は、紫の上は大事な存在だと思っただけでも、紫の上が生むことができなかった女の子を期待し、そして、紫の上と違って権威のある家族の後見に恵まれている妻を捜さなければならない、ということなのです。

## 紫の上の苦悩

紫の上のように男性と同居していた妻は、他の妻に比べて優位にあっても、その優位は相対的なもので、法制的に或は慣習的には、他の妻から隔絶される誰一の地位でも、絶対的に不動な地位でもありませんでした。多妻が許される社会通念のもとで、正妻が時には他の妻と並立されたり、時には新しい正妻にとって変わられたりするというのが当時の実態でした。紫の上は源氏と

一緒に住むにふさわしい妻になりますが、ご承知のように、物語の中で、さまざまな苦悩を味わいます。まず、源氏は、流竈の時期、須磨の浦から播磨の明石の地に移って、そこで出家した前播磨守の娘、明石の君に出会い、その人の腹に娘を生ませています。源氏の子を生むことのできなかつた紫の上にとっては、この明石の君の出現は大きな打撃だったに違いありません。しかし、源氏の配慮によって、明石の君の生んだ娘を手もとにあずかり、将来、后になるための最高の教育を施しました。また、源氏は三十二歳の時、藤壺が病で亡くなってから、従姉の朝顔の姫君に激しく執心を燃やしたこともありました。平穏な妻の日々は過ごせなかつた紫の上にとっては、勿論、明石の君と夕顔の出現は大きな危険だったわけですが、なかでも彼女が特に苦悩したのは、源氏が四十歳の年、朱雀皇女の女三の宮が源氏の新しい妻として六条院に迎えらるという事態に直面した時だと考えられています<sup>13</sup>。やはり、「若菜」の巻では大人になった紫の上は、初めて恋と結婚の不安を感じるようになります。

その時、紫の上は三十二歳、女三の宮は十四、五歳の若さであり、宮はその身分からして源氏の正妻となるべき人物です。紫の上は絶望しますが、これまで源氏の伴侶として、六条院の中心である春の町の主人として生きてきた誇りがこれを許しません。彼女は源氏と女三の宮との結婚を心から歓迎し祝福するように振る舞いますが、この歌があきらかに示しているように、本人にとっては、人知れぬ苦悩を押し殺しつつ生きていく日々なのです<sup>14</sup>。

身にちかく秋や来ぬらん見るままに青葉の山もうつろひにけり<sup>15</sup>。

この苦悩から離脱しようと彼女は出家をこころざしますが、源氏の許しを得られず、実現できませんでした。勿論、この出家の願望は後生の願いと関係ありません。源氏と女三の宮の結婚によって、男女の愛の無常を深く感じたことから、出家を望んだと考えられています。

出家の願望が実現できなかつた紫の上はやがて発病しますが、これは肉体の生理的な病というより治療が効かない心の病として描かれています。よく指摘されているように、『源氏物語』において物怪は、一夫多妻制度から自然に生まれた女性の不安と苦悩を表すものと言えます。特に、ある種の女性の人物の造形においては、見かけと内面の分離がはっきりと見られる時に、物怪が現れて来ると考えられています。物怪というのはライバルになった女性を直接攻撃するよりも、他の女性に夢中になった男性、つまり自分の苦悩の原因になった男性を苦しめる強力な道具になります<sup>16</sup>。

これまで見てきたように、源氏の愛情によって正妻の座に入る紫の上には、子ども、特に女の子がいないので、将来的には不安が多々あります。とはいえ、明石の君の養母になることにより、源氏の正妻の役割を立派に果たしたと言えるのではないのでしょうか。平安時代の貴族社会

では、誰よりも夫を榮達させるために努力している妻は北の方になれるという通念があったと考えれば、紫の上は源氏の北の方になれると思われそうです。作者紫式部は紫の経験を通じて、一夫多妻の社会では、家族の援助と子どもがない女性は幸を感じながらも、正妻の座に入る可能性があるかと語ろうとしたのではないのでしょうか。

平安時代という、激しい変化のない平和な時代の社会では、結婚、そして出産は、人生を完全に変えるほどの、極めて大事なことと見なされていました。その社会では身分の高い女性も身分があまり高くない女性も中心的な役割を果たしていましたが、多妻が許される社会だったため、さまざまな不安や苦悩をかかえていました。

「夕霧」の有名な箇所では、紫の上は、女性の辛い人生について、自分の意見をつぎのように述べます。

女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし。ものあはれ、をりをかしきことをも、見知らぬさまに引き入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはええしきも、常なき世のつづれを慰むべきぞは、おほかたもの心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむも、生はしたてけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや。心のみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに、あしき事よき事を思ひ知りながら埋もれなむも、言ふかひなし<sup>17</sup>。

紫の上の声には同じ社会の多くの女性、そして作者紫式部の声も聞こえるかと思われます。感情と物哀れで溢れている平安時代の文学の作品は、女性の不安定な位置から生まれたということは、藤岡作太郎氏も指摘していますが、『源氏物語』を読むという体験を通して、そのことはたいへんよく理解できます。やはり平安時代の物語、日記、そしてその中に納められた歌を読んでも、しばしば作品の主人公は女性であり、当時の社会でははっきり言うことができなかった、女性たちの心の中にある期待や切望や不安が、様々な形で描かれています。こうして、結婚・出産という、ただでさえ精神的肉体的負荷の多い経験が、当時の権力構造と極めて密接な関係を持っていたことから来る、女性たちの人生の不安や苦悩をかてとして、世界的にも最高峰を示す日本の女流文学が花開いた、と言えるのではないでしょうか。

<sup>1</sup>片桐洋一、福井貞助、高橋正治、清水好子『竹取物語、伊勢物語、大和物語、平中物語』（小学館、1972年）、133頁

<sup>2</sup>安部秋生、秋山虔、今井源衛『源氏物語 I』（小学館、1970年）、314頁

<sup>3</sup>湖淵『平安貴族婚姻慣習と源氏物語』（笠間書院、2001年）、344・346頁

<sup>4</sup>安部秋生、秋山虔、今井源衛、前掲書 I、280頁

<sup>5</sup>湖淵、前掲書、356・358頁

<sup>6</sup>安部秋生、秋山虔、今井源衛、前掲書 II、63頁

<sup>7</sup>安部秋生、秋山虔、今井源衛、前掲書 II、67頁

<sup>8</sup>安部秋生、秋山虔、今井源衛、前掲書 I、124頁

<sup>9</sup>木村佳織「葉の上の妻としての地位 呼称と寝殿居住の問題をめぐって」（『中古文学』1993年11月）

<sup>10</sup> Carolina Negri, "Marriage in the Heian Period (794-1185). The Importance of Comparison with Literary Texts", *Annali dell'Istituto Universitario Orientale*, vol. 60-61 (2000-2001), Napoli, 2002, pp.17-18

<sup>11</sup> 服藤早苗『平安朝の母と子』（中公新書1991年）、109・112頁

<sup>12</sup> 松尾聰、長井和子、『枕草子』（小学館、1974年）、128頁

<sup>13</sup> Royall Tyler, "I Am I Genji and Murasaki", *Monumenta Nipponica*, LIV, 4 (1999), p. 456

<sup>14</sup> 秋山虔『源氏物語の女性たち』（小学館、1991年）、47頁

<sup>15</sup> 安部秋生、秋山虔、今井源衛、前掲書4、82頁

<sup>16</sup> Doris G. Bargen, *A Woman's Weapon. Spirit Possession in the Tale of Genji*, Honolulu, University of Hawaii Press, 1997, pp. 6-9

<sup>17</sup> 安部秋生、秋山虔、今井源衛、前掲書 IV、442頁

## 『源氏物語』における櫛の呪力

國學院大学大学院特別研究生  
菅原郁子

『源氏物語』絵合巻は、六条御息所の遣女前斎宮の後宮入内から始まる。まさに、光源氏と藤壺中宮との関係によるものであった。祝いの品として、朱雀院から前斎宮へ豪華絢爛な贈り物が届く。ご装束の数々や香の壺など、他に類を見ないほどの品々が贈られる。そのなかに、「御櫛の箱」があった。これは、前斎宮が伊勢下向の際、朱雀院から受けた「別れの小櫛」を想起させるものであり、朱雀院の思慕が今もなお続いていることを示すものであった。

本発表では絵合巻を中心に考察する。まず入内に際し、前斎宮に対する朱雀院と光源氏のそれぞれの思いが浮き彫りになる場面を確認する。そのうえで、「薫衣香」が匂い立つなか、「御櫛の箱」の存在だけに視点が集約されていくことに着目する。『源氏物語』中、「櫛の箱」が正式に贈られた記述は絵合巻のみである。その後、「櫛の箱」は前斎宮から女三の宮へと譲り受けられるものとなる。櫛の呪力が、前斎宮から女三の宮へとどのように機能していったのかを明らかにしたい。